

## 歌会始

1月12日、皇居宮殿において新年恒例の「歌会始の儀」が行われました。非常に厳粛な雰囲気の中、天皇、皇后両陛下はじめ皇族方、天皇陛下に招かれた召人や選者、更には一般公募によって選ばれた10人の歌がそれぞれ詠み上げられていく様子は、テレビを通してご覧になった方もいることでしょう。

「歌会」というのは、人々が集まって共通の題で歌を詠み、披露しあうもので、年の初めに行われるのが「歌会始」と呼ばれています。

「歌会」の歴史は随分と古く、奈良時代には行われていたといわれていますが、「歌会」の中でも天皇が催される歌会を「歌御会」といい、年の始めの歌会として催される「歌御会」を「歌御会始」といわれてきました。この「歌御会始」の起源ははっきりしませんが、鎌倉時代中期、亀山天皇の文永4年（1267年）の1月15日に宮中で「歌御会」が行われたという記録が残っているそうです。その後、宮中の伝統行事の一つとして行われてきたものですが、明治時代には一般の国民からの詠進も認められるようになりました。その後幾度かの変遷を経て、昭和22年（1947年）からは、現在のように国民からも和歌を募集し、在野の著名な歌人に委嘱して選歌の選考がなされるようになりました。それにともない、お題も平易なものになったといわれています。

和歌という31文字の定型詩には、誠に不思議な力があると思います。たった31文字という限られた空間に、一見不自由のようでありながら、というより、その不自由さの故に、そこに人それぞれの思いを凝縮することが出来るのですから。

さて、今年のお題は「岸」でした。今年詠われた歌の中には、東日本大震災にちなむものが多かったように思います。

天皇陛下は、

津波来(き)し時の岸辺は如何になりしと

見下ろす海は青く静まる

皇后陛下は、

帰り来るを立ちて待てるに季(とき)のなく

岸とふ文字を歳時記に見ず

とお詠いになりました。

両陛下は度々被災地を訪れ、被災された方々を慰め、勇気づけられました。が、両陛下のお歌からは、被災地や被災された皆さんに対する思いの深さを感じます。

また、約1万9千首の中から選ばれた中に、福島県の沢辺裕栄子さんの  
巻き戻すことのできない現実が  
ずつしり重き海岸通り

という歌があります。出来るものなら時計の針を大震災の前まで巻き戻したい、そう思っている人は多いと思います。しかし、そうはならない現実を直視して、先へ進むしかありません。

また、茨城県の寺門龍一さんは、  
いわきより北へと向かう日を待ちて  
常磐線は海岸に行く

と詠っていますが、一日も早く、被災地が元の元気な姿を取り戻すことが出来るよう祈る気持ちは、国民共通の思いではないでしょうか。

「歌会始」は宮中の儀式として行われているものですが、皇室と国民を繋ぐうえでも意義がありますし、何よりも、天皇、皇后両陛下、皇族方、一般国民の皆さんが等しく、共通のテーマで歌を詠みあうという文化は素晴らしいものだと思います。

来年のお題は「立」です。皆さん、チャレンジしてみても如何でしょうか。

(塾頭 吉田 洋一)